

労協連だより

古村伸宏（日本労協連・事務局長）

あと1週間で全国総会であり、この所報が刊行される頃には、新年度・新体制が稼働していることだろう。前号で、労協運動の歴史的な変化について記し、その事実を体感知る場として、総会への参加を訴えた。

この間、各地の加盟組織の総会が目白押しである。連合会本部役員は分担し、各地の総会に出向き、歴史的改革を訴え、各地の現状を掴み取ることに相当のエネルギーを割いている。総会一つひとつは、独自の課題を掲げつつも、「本物の労協に」というテーマが改めて強く打ち出され始めた。労協の法律が出来る時代の中で、これまでの歩みを踏まえつつ、もう1度自分たちの存在価値を問う機運だ。「名は体を表す」ではないが、名称に「労働者協同組合」を正式に掲げる提案も増えてきた。

連合会総会は、飛躍をより強固で不動のものとするための、いくつかの具体的提案が行われる。新しい事業展開、ネットワーク化を促進する運動化、しくみやシステムの構築など、「新しい実践の挑戦」であり、全国あげての取り組みを通じて、労協連合会全体のグレードもまた格段に上げていこうという意欲的なものだ。これらの挑戦課題を網羅し、実践の中で具体的に問われるのは、「新しい人々の結集」を、連合会ベースはもちろん、各加盟団体そのもので実現しうるかということだ。人の結集は新しい可能性や力、発想をもたらす。固定観念や経験主義を徹底的に排し、自らを「挑戦主体」として自覚

できるかどうか、ということでもある。その決意を少なからず感じさせる総会が各地で始まっていることは、全国総会の質を持ち上げる楽しみな傾向である。

法制化運動の実践的な取り組みとして、連合と協同で仕事おこしに挑戦する検討も始まった。まず第1候補は、福祉やNPOなどと労働組合の関係づくりに意欲的な「連合埼玉」であり、先日事務局長との懇談の機会を得た。既にいくつかの労働組合の中からワーカーズコープが立ち上がり、うねりになるうとしている。越えるべきハードルは高いが、確実に「労働運動」の変化と「総合戦略」が形成されていく予兆のようなものを感じる。労働の場づくりと労働の価値に根ざした労働運動が求められている中で、歴史的な実験がはじまろうとしている。

総会には、ICAのババリーニ会長・全日本民医連の肥田会長・高根台団地自治会の会長など、多彩な初登場の来賓のご挨拶が予定されている。そんな興奮をみなぎらせ、今一度「協同労働」の実感・体感を全国の共有財産にしたい。そして「仕事おこし」の事実を生み出した、新しいパワーと顔が壇上を豊かに彩る総会にし、様々な苦労も超え、胸をはって「日本の労協運動を背負って立つ」元気を生み出したい。背筋を伸ばし、腰を据えて「新しい労協連合会」の活動を創造する契機がはじまる。